

釣れ釣れなるままに

2009年思い出の釣行記 PART. 3

# 俊の友を引かれる



鹿島釣狂

☆釣行日	平成21年05月31日
☆入釣場所	小平薬川河口
☆釣果	アカハラ 500 mm以下3
	モズクガニ 3

### 小平薬川の上海蟹

前年度の襟裳大会は、アカハラのエサにばかりヒットしたこともあり、アカハラ釣りの練習を兼ねて小平薬川河口へとエサの確保に行く。小平薬川河口はアカハラ釣り大会の有名場所だが、私は一度も入釣したことがなかった。イカゴロを30本用意する。

小平湾洞の砂浜では、サクラマスを狙った釣り人が5名おり、そのうちの一人が40cmほどのサクラマスを手にして携帯のシャッターを切って友人に送っているところだった。サクラマス狙いでルアーを用意しておけばよかったかなとも思う。

河口で2本の磯竿を出す。1本は2号道糸に3号鉛を通し、もう1本はウキを通してゴロ針をチョイ投げする。しかし、すぐにでも釣れると思っていたアカハラだが釣れない。10cmほどのウグイがゴロの匂いに群れて海面にさざ波を立てている有り様だ。

川ガニが釣れた。根掛かりかと思って引くと、真っ黒な毛を生やしたハサミを甲羅の上に持ち上げ私を威嚇しながらやって来た。これは口にハリがかかっていたので難無く上げることができたが、そのほとんどが浅場でエサを放してしまう。それでやむなく長靴に水が入らないところまで迎えに行つてエサを放したところを蹴飛ばして砂浜に上げたのだ。

エサにするアカハラは川筋に入ってようやく25cm2本、50cm1本上げたので、襟裳大会の分はなんとか確保することが出来た。帰宅後、川ガニをゆでると真っ赤になった甲羅から脂がしみ出て白い膜を作っており酒がはかどった。



女房には上海蟹だといって勧めたが手を出そうとしない。しかたなく肉を取り出して皿に載せてやった。

ガキの頃、故郷の田園をうねって流れる石狩川で川ガニを捕ったのを思い出す。釣りをしていたままたま釣れるのだが、それに飽きたらず直径50cm程のカニ網を作ってその真ん中に釣った魚を針金で通す。手頃な長さに切った河原の柳にカニ網を吊るし、緩やかな流れの中にそっと仕掛ける。しばらく間を置いて引き上げると川ガニが2～3杯入っているのだ。

稲刈りが始まった頃の月夜の晩に隣近所のガキ大将たちと捕りに行く。そして、カマスに一杯捕った戦利品を分け前としてそれぞれの家庭に配って歩いた。我が家では祖母がその生きたままの川ガニを大鍋に入れてから釜戸に火をつける。カニは鍋の中でしばらくガサゴソとやっているがその内に観念して静かになる。茹で上がって真っ赤になったカニを家族中でおやつにしてむしゃぶりついたのだ。

子どもの頃に釣った魚はウグイやフナでそのほとんどが飼っていた鶏やブタのエサになっていたが、カニだけは人様の胃袋に収まって喜ばれた。その光景を見ながら子ども心にも嬉しく思ったものだ。

### 岩見沢釣遊会第3回大会

☆開催日 平成21年06月07日

☆開催場所 笛舞港～襟裳岬港

☆入釣場所	東歌別			
☆釣果	アブラコ	476	mm	4/12
	カジカ	410	mm	1/1
	重量	638	0g	
☆成績	合計点数	1524	点	
	優勝			

### 心残り

天気予報をネットで検索してみた。大会日に近づくにつれて襟裳方面の風・波予想が青から黄色、オレンジと変化していく。釣りをするには相当厳しそう。例年だと襟裳は西の歌別から東の岬港へと順に釣果が上がっていている。また、東歌別は多少の高波でも釣りになっていたの釣りは東歌別と早々に決めてしまった。

出発前日、町役場の職員が職場に尋ねてきて今後の行政のあり方についての相談を持ちかけてきた。頭を付き合わせて話し込み時計を見ると午後7時を回っていた。明日に迫った釣りエサの準備をしなければならないのだ。フィッシュランド滝川店に電話すると、午後8時まで営業しているというので慌てて向かう。事前に決めていたエサの量は、天候が悪いため少なめにした。

出発日、大会に出かけようとする、昨日相談を持ちかけられた方からタケノコを頂いた。新十津川町の山奥で採ってきたものだ。タケノコ採りはなかなかの重労働だが、惜しげもなくどっさり置いていってくれた。いつも魚を頂いてばかりだからと言う。茹でたばかりのタケノコにワサビ醤油や、辛子マヨネーズをつけて頬張ると、春の大地の匂いを感じて嬉しくなってくる。出発時刻が迫っているので今日は「おあずけ」とならざるを得ないが、山菜に目がない女房に「帰ってくるまで残しておけよ」と言い含めておいた。

また、本日はWカップサッカーの予選で「ニッポン」がウズベキスタンと戦う。今日勝てば南アフリカ本戦出場が決まるのだ。その試合をテレビ観戦できないのが心残りである。元コンサドーレ監督の岡田氏がジャパンを率いているが、何とか良い闘いをしてほしいものだ。さらに、集合場所に向かう途中のラジオでは、日本ハムがダルビッシュを擁してジャイアンツと戦っている。巨人の先発は内海だ。ワールドベースボールクラシックでは共に戦った仲間だが、是非打ち負かしてもらいたい。これも応援できないのが心残りである。

### 赤い玉の威力

集合場所につくと「北海道のつり」6月号の掲載写真が話題となっていた。仲間の相馬、秦野、大前氏が大きな獲物をぶら下げて巻頭写真を飾っていたのだ。「去年の大会でそんなに大きいものを釣ったんだっか」「下位の成績ではなかったか」などと好き放題を言われて、「自分の魚は小さいので他の人の魚を撮ってくださいと断ったが、記者に『手前に大きく腕を突き出して』と言われるままに写真を撮られた」と反論する。その言葉とは裏腹に



3人の顔は大いに嬉しそうに見えた。

札幌からのお客さんを迎えて22名の参加者で出発した。頂点に立つのは誰なのだろうか。私の隣にはお客さんの古田氏が座った。彼は磯釣り大会に参加するのは最近になってからで、本来は溪流釣りが専門だという。若い頃は道東や道北まで何度も遠征したが、近頃は仕事が忙しく近隣の川でヤマメを狙っていると話してくれた。特に最近は息子の方が自分より大物を釣ることが多くなってきたということだ。溪流釣りには私も目がなく、周知の仲のようにヤンヤと語り合った。そしてお互いの健闘を誓い合っただけでバスから降りたのだ。

東歌別バス停からの下り坂を桑原、阿部氏とともに歩いていく。突き当たりの舟揚場周辺には釣り人が並んでいたのだから、彼らは左方向の方舟揚場目指して消えていった。私は、一カ所だけ空いていた溝で打ち込みを開始した。沖が荒れているので溝には流れ藻が溜まりそれらを引き上げている合間にも小カジカやハゴトコが釣れて規定の魚は早々に揃った。

真っ暗な空からヘッドライトの光を浴びた横殴りの雨粒が落ちてきて雨合羽を濡らす。大物は夜が明けて潮が引いた岩場の先に出てからだろうなと思っていると、遠投していた竿先がグインと大きく入った。そして、ホンダワラをお供にしながらアブラコ45cmが上がった。

少し小降りになった3時頃、これも遠投した竿によいアタリが出て竿を煽るとググッと釣った。一旦ホンダワラの藪の中に潜り込まれたが高い防潮堤の上からなので何とか魚を引きずり出すことが出来た。獲物が防潮堤の下まで来たところで、そのまま引き上げるかと躊躇したが、何とかなるだろうとキリキリとリールを巻きながらのクレーン釣りとなった。体高のある丸々と太った赤黒いアブラコでメジャーを当ててみると49cmを指していた。奴はハリスに赤のエッグボールを付けたカツオに食いついていた。この玉は今年になって何となく仕掛けに付けたもので、初めに釣れたアブラコもこの玉の付いたハリだった。喉の奥の方までハリを飲み込んでおり、この仕掛けはこれ一つしかなかったこともあって、アブラコの鰓蓋をハサミで丁寧に切って取り出した。その後のアブラコもこのハリにばかり来たためクシャクシャ、ドロドロになったが、何度も洗って手直ししながら使い続けた。

### カジカにも赤い玉

ヘッドランプの明かりを必要としなくなった。この時点で49cmを頭にして40cm以上のアブラコ4本が揃ったが、嫁のカジカが25cmのままである。背後の細道では漁師の車の通りが頻繁になり、竿が行く手を邪魔しないように注意してその都度運転手に向けて頭を下げていた。何度も漁師に頭を下げているとその内の一人が「釣れねえべ」と言いながら話し掛けてきた。最近の漁模様のことを伺っていると、竿先を見ながら「引いているぞ」と教えてくれる。この時点で私は大物しか食いつけないようにと大振りのカツオをエサにしてハゴトコのアタリは放っておいていたのだが、何度も「引いてるぞ」と教えてくれるのだ。それでも放っておくと「釣る気がないのなら、俺が上げるぞ」と言うので竿を手渡

した。「重いぞ、大物だ！」と言ってあげたのはやはりホンダワラの付いたハゴトコだった。何だかお相手しているのも疲れてきたので、前の岩盤に出て行くには少し早い片付けて潮の引くのを待つことにした。

風が強くなってきたが波は静かなものである。周りにいた釣り人もそれぞれ思い思いの岩に乗り始めた。私が岩に乗ったのは7時頃である。ホンダワラの中に遠投した竿にアブラコのアタリが出て、海藻の密林から抜くのに手間取っていると、近投の竿にガクン、ガクンとカジカの大当たりが出た。アブラコの方は一旦放置し、カジカのアタリの出た竿に飛び付く。思った通り40cmほどのカジカだった。やはり赤い玉の付いたハリを飲み込んでおり、それを取り出すために口を切ろうとハサミを捜すが見当たらない。先ほどの防潮堤の上に忘れてきたのだ。仕方なく、カジカの口の奥を何度も確認しながらチモトの先の部分にペンチを挟んで何とか取り出した。

その仕掛けを振り込んでから、先ほど放置したアブラコが付いた竿をあげる。やはり昆布やホンダワラの根に深く潜り込んでなかなか出てこない。ブチッ、ブチッとホンダワラを切る感覚が手元に伝わる。ようやく取り込んだところで先ほどの赤い玉の付いた近投の仕掛けにまたまたカジカの大当たり。しかしこれはグッと重みが乗った後すぐにすっぽ抜け、チモトを結んでいたハリスがパーマ状になって戻ってきた。赤い玉はもちろん付いていない。どうも、カジカが呑み込んだハリを取り出すときに傷つけてしまったらしい。先ほどのカジカより大物だったと感じるのは釣り人の性なのだろう。

## 心残りはい

その後アブラコを6本追加する。どれも40cmを超えるものである。1本バリにして遠投した竿にばかり来るので、手元に寄せるまでが大変である。一面に続く根原である。一度藻原から出してもまたすぐに潜り込む。だんだんと釣るのが億劫になってくる。こんなに釣れるのに何を贅言しているのかと言われそうだが、規定の魚は揃っているのではさらに大物がくるかもしれないという思いからだけである。魚のアタリがあってもものんびり構えているので、ハリは必ず飲み込まれてしまっている状態だ。



フラシで生かしておいた本日の釣果をぶちまける。傷つかないハゴトコ、カジカ、アブラコは海に返す。5匹揃うまではととっておいた小物はカモメに見つけられやすいようにと高い岩の上に乗せておく。荷物を背負って後ろを振り返ると、早速カモメが群がっていた。

### 審査結果

優 勝	鹿島釣狂	1 5 2 4 点	(アブラコ476mm+カジカ 410mm+6380g)	東 歌 別
準 優 勝	嵐 光博	1 3 8 9 点	(アブラコ450mm+カジカ 393mm+5460g)	西 東 洋
3 位	相馬義博	1 3 3 5 点	(アブラコ445mm+カジカ 332mm+5580g)	オノドリ
4 位	桑原 理	1 2 5 5 点	(アブラコ435mm+カジカ 372mm+4480g)	東 歌 別
5 位	吉井 博	1 2 2 5 点	(アブラコ465mm+カジカ 348mm+4120g)	西 東 洋
身長優勝	大前健治	1 4 9 3 点	(アブラコ476mm+カジカ 411mm+6060g)	菊 水

審査には45cm以上のアブラコ4本と40cmのカジカを提出した。この悪天候では釣りものも少ないかなと思っていたが、乗り込んできた皆さんの口調とは裏腹に大物がゾロゾロと提出された。

私と一緒に東歌別で下りた桑原氏は、以前私が入賞を果たしたことのある舟揚場から左の盤へと同じコースをたどったらしく4位入賞を果たした。3位の相馬氏は前週の「とんとん会」情報からオノドリ岩に向かった。自衛隊前で下りたがその後の進路が分からずに切り立った崖を下ったようだ。イメージしていたオノドリ岩とは全く違う見慣れない場所

で竿を出していると、札幌の釣り会の人に出会い、昨年急逝した我が会の佐々木秀美氏の話に発展したのだ。その釣り人に釣り場を譲って貰い、打ち方も丁寧に教えてもらってその溝で粘った結果、明け方からアブラコの入喰いとなったようだ。準優勝の嵐氏は5位の吉井氏と共にエンドモ岬に向かったが、波が高くて狙いの場所には入れなかった。仕方なく波の死んでいる後方で竿を出したのだ。ベテラン釣り師さすがである。身長優勝を果たした大前氏は菊水で下りたが暗い内は釣りものが無く、明けてから岩盤の前に出てアブラコがヒットしたようだ。アブラコは私と同寸で、カジカも1mm大きかったのだが1匹小物が混じり重量が足りなかったようだ。そんなこんなで私に優勝が転がり込んできたのだ。

大会からの帰り道で馴染みの床屋に寄って散髪してもらった。女将によるとサッカーWカップ予選でニッポンが本戦出場一番乗りを果たしたということだ。中村健吾のスルーパスを岡崎がシュート、キーパーが弾き返したところを再度頭で押し込んで1対0で勝ったのだ。そのヘディングは岡崎の頭に偶然当たったと思われるようなものだったらしい。

日ハムの方は、せっかくダルビッシュが投げたのに3対2で負けたのだそうだ。ダルビッシュが5者連続ヒットを打たれて3点を失う。ハムの2点は稲葉の打点によるものらしい。戦いの様子の中継してくれているように説明する女将には、本日の我が戦利品を進呈させていただいた。そして何より、出発前の1番の心残りだったタケノコの方は、無事に私を待っていてくれた。



大会入賞者



前列左より 準優勝：嵐 光博 身長優勝：大前健治 優勝：鹿島釣狂 3位：相馬義博  
後列左より 4位：桑原 理 5位：吉井 博